

日本古典文学大辞典

第一卷



あ—かほ



# 日本古典文学大辞典

第一卷

岩波書店

日本古典文学大辞典 第一卷 第一回配本(全六卷)

一九八三年一〇月二〇日 第一刷発行 ©

定価 一三〇〇〇円

編集者 日本古典文学大辞典

編集委員 会

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二一五―五  
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三―五四二二  
振替 東京六二六三〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

編集委員

監修

市古貞次

野間光辰

秋山虔

大久保正

大谷篤藏

久保田淳

佐竹昭広

信多純一

堤精二

中村幸彦

(五十音順)

## 序

『日本古典文学大辞典』全六巻、ようやく成る。これはもと岩波書店が創業七十年記念事業として出版を企画し、その編集を挙げて我々に委嘱するに至ったもの。爾来十余年、ほぼ稿成り、まず第一巻より発行する運びとなったこと、欣快これに過ぎるものはない。

改めていうまでもなく、我が国古典文学の研究は長い歴史と豊かな業績を持っており、とりわけ最近三十年間における研究の進歩発展は目覚ましいものがある。それに伴って研究者人口の増加また著しく、国内はいうに及ばず国外においても、今や日本古典文学の研究は世界的になりつつある現状である。この際我々は、過去における幾多先学の業績を継承整理すると同時に、現在における研究の成果を紹介し、以て来るべき時代を担う若き学徒のために、研究の基礎もしくは手がかりを提供しなければならぬと考えた。

本来ならば、古代より現代に至るあらゆる作品・作者・問題を網羅して、「日本文学大辞典」というべきものを編集すべきであったかも知れぬが、敢えて明治以前を以て区分した。ただし収録の作品については、明治以後に出版もしくは発表されたものであっても、その成立明らかに明治以前に属するものはこれを収め、また作者についても同様、その主たる活躍の時期より判断して、たとえ明治以前の出生たりといえども、その活躍明治以後に属するものは、原則としてこれを除外することにした。しかして最近の研究の趨勢に鑑み、広く言語・思想・歴史・民俗・芸能・宗教・教育・外国文学等の隣接諸科学からも、古典文学の研究に必要な項目を採択することにした。

またその一方では、古典文学を単に一部研究者の占有物とするにとどめず、広く一般の文学愛好者との共有物として、その鑑賞と理解に少しなりとも役立てたく、学問的には記述あくまで厳正を期すると同時に、行文平易、何人にも読解容易なるように配慮した。

かくの如き方針は編集委員会において討議決定せられ、委員会はさらに時代別・分野別の分科会を開いて採録すべき項目また執筆者を選定、引続き原稿の確認・調整等に日夜を分たぬ努力を傾けて来た。岩波書店においても亦、執筆依頼・原稿収集・校正等の実務に当たったこというまでもない。それには嘗て『日本古典文学大系』『国書総目録』『日本思想大系』等を刊行した時以来の豊富な経験が、大いに役立ったことであつた。

以上簡単ながら、本辞典刊行に至るまでの経緯を記して序とするが、この間に賜った各専門分野諸氏の御助力に深く謝意を表す。また、企画立案の当初より適切な助言を惜しまれなかつた祐田善雄氏を早く喪い、さらに編集委員として終始重要な役割を分担協力せられた大久保正氏の急逝に遭つたことは、何としても悔まれてならぬ。そのほか本辞典への寄稿が絶筆となつた方々も十指に余る。もし霊あらば来つて我々と刊行の喜びを共にし、所期の如く本辞典が日本古典文学の研究と鑑賞に貢献することを温く看守り給えと祈る。

一九八三年十月

市古貞次

野間光辰



三、書名または作品名は、おおむね角書・副題などを省いた。角書を含めて呼び慣わしているものについてはこの限りでない。

四、見出し項目には、現代仮名づかいでその読みを示した。

## 見出し項目の配列

- 一、現代仮名づかいによる読みに従って、五十音順に配列した。
- 二、直音は拗音・促音の先にし、また清音、濁音、半濁音の順に配列した。
- 三、長音(ー)は、発音に従って、例えばユーカラはユウカラ、ロ一マ字はロオマ字の位置に配列した。
- 四、同音同表記の見出し項目が二つ以上ある時は、見出し語の下に123……と付記して区別した。

## 記号

『』 書名・雑誌名を示す。

〈〉 引用文の出典、考証の典拠・唱説者などを示す。

「……詩酒の楽遊と為さん」〈本朝文粹・卷十〉

正和元年(三三)十月十日没〈無住国師行状〉

四月の内裏密宴に……招かれてゐる〈御堂関白記〉

……とする説〈佐佐木信綱〉もある

\* 本辞典に見出し項目として立っていることを示す。ただし、参考の便宜のために付したもので、網羅的ではない。なお、例えば見出し項目は「後白河天皇」とあっても、誤解の生じない限りで、後白河院<sup>\*</sup>後白河上皇<sup>\*</sup>とする便法を講じた場合がある。

↓ 参照すべき記述がその項目にあることを示す。

⇩ 解説がその項目にあることを示す。

／ 原典からの引用において、詞書(または題)と和歌、前句と付句との区切りを示す。その他特に原文の改行を示す必要のある場合に用いた。

小字で示した漢数字(平数字)は、西暦、国歌大観(旧版)番号、函架番号である。

和暦を西暦に換算するには、その和暦の一月一日に対応する西暦紀年をもってし、両者の間のずれを無視した。



執筆者一覽

v 執筆者一覽

東 喜望	淺見和彦	麻原美子	淺野三平	淺野建二	淺野晃	朝倉治彦	淺川征一郎	吾郷寅之進	秋山光和	秋山 虔	秋谷 治	秋本吉徳	秋月龍珉	赤羽 淑	赤瀬信吾	赤井達郎	青山忠一	青木正次	青木生子	青木賢豪	青木和夫
飯田瑞穂	飯田正一	伊井春樹	安藤英男	安藤武彦	安藤菊二	有賀祥隆	有吉 保	有川美亀男	荒木 尚	荒木 繁	荒木見悟	荒川秀俊	新井栄蔵	網野善彦	天野文雄	阿部俊子	阿部秋生	穴山 健	熱田 公	安蘇谷正彦	阿蘇瑞枝
石田瑞麿	石田尚豊	石田穰二	石毛 忠	石黒吉次郎	石川 了	石川松太郎	石川真弘	石川八朗	石川 徹	石川常彦	石川潤二郎	石井 進	池宮正治	池田廣司	池田 皓	池田利夫	池田 重	池田敬子	池上禎造	池上洵一	井口 洋
稻岡耕二	糸賀きみ江	位藤邦生	伊藤正義	伊藤博之	伊藤 博	伊藤敏子	伊藤 敬	一海知義	市橋 鐸	市古夏生	市古貞次	板谷 徹	板坂耀子	出雲路修	和泉 新	石村喜英	石原 明	石野政雄	伊地知鐵男	石田百合子	石田百合子
今尾哲也	今枝愛真	今江広道	今泉淑夫	今井源衛	今井宇三郎	揖斐 高	井上義巳	井上宗雄	井上 豊	井上敏幸	井上 忠	井上隆明	犬養 孝	犬養 廉	犬井善壽	乾 裕幸	稻田利徳	稲沢好章	稲垣泰一	稻賀敬二	稻賀敬二
上野洋三	上野さち子	上野 理	植谷 元	上田正昭	上坂信男	植木行宣	岩本 裕	岩松研吉郎	岩田秀行	岩田 隆	岩沢愿彦	岩佐美代子	入矢義高	彌永貞三	井本農一	井村哲夫	今西凱夫	今西祐一郎	今西 實	今成元昭	今成元昭
大磯義雄	大朝雄二	扇畑忠雄	遠藤嘉基	遠藤光正	遠藤 宏	遠藤和夫	江本 裕	海老沢有道	榎坂浩尚	江湖山恒明	梅津次郎	梅谷文夫	内山美樹子	内野吾郎	内田保広	内田武志	宇田敏彦	白田甚五郎	上村悦子	植松 茂	植松 茂
大庭 脩	大野 晋	大沼晴暉	大取一馬	大坪利絹	大槻 修	大塚光信	大谷雅夫	大谷篤蔵	太田善麿	太田辰夫	大曾根章介	大隅和雄	大島建彦	大島貴子	大久保良順	大久保廣行	大久保忠国	大久保次郎	大口勇次郎	大内田貞郎	大内初夫
興津 要	荻田 清	小木 喬	小川武彦	岡本 勝	尾上新太郎	岡見正雄	岡部政裕	尾形 仵	岡田利兵衛	岡田米夫	岡田正世	岡田武彦	岡嶋偉久子	小笠原春夫	小笠原恭子	岡 雅彦	大矢根文次郎	大矢真一	大林太良	大橋正叔	大橋紀子

笠松宏至	家郷隆文	景山正隆	蔭木英雄	柿本 奨	織茂三郎	表 章	小野寺静子	小野田光雄	尾上兼英	小野 寛	小野 晋	越智美登子	小高道子	小田幸子	小関清明	小沢正夫	長田貞雄	尾崎暢殃	尾崎知光	奥村三雄	奥村恒哉	奥野純一	奥田 勲	荻原浅男
鎌田茂雄	加納重文	金子武雄	金子金治郎	金子和正	兼清正徳	金谷 治	金沢規雄	金岡秀友	金井英雄	金井寅之助	金井清一	金井清光	加藤裕一	加藤隆久	加藤定彦	勝俣鎮夫	片山 享	片野達郎	瀉沼誠二	片桐洋一	片桐 登	粕谷宏紀	梶原正昭	柏原祐泉
岸本芳雄	岸上慎二	木越 隆	菊地勇次郎	菊池 明	菊竹淳一	菊田茂男	神堀 忍	菅野 宏	神作光一	川村晃生	川平 均	河原由雄	川端善明	川田貞夫	川崎庸之	川口久雄	川口常孝	河北 騰	川上新一郎	河合真澄	萱沼紀子	亀井 孝	上條彰次	加美 宏
黒岩一郎	蔵中 進	倉田淳之助	熊倉功夫	熊谷武至	窪田章一郎	久保田淳	久保木哲夫	工藤力男	工藤豊彦	日下 力	金原 理	金田一春彦	雲英末雄	久曾神昇	木村八重子	木村正中	木村三四吾	木下正俊	木下政雄	木下資一	木南卓一	木藤才蔵	北村 学	北川忠彦
小林祥次郎	小西甚一	後藤祥子	後藤重郎	後藤昭雄	小高 恭	小島憲之	小島孝之	国領不二男	鴻巣隼雄	神野志隆光	河野六郎	河野頼人	河野元昭	興膳 宏	小出昌洋	小泉 弘	小池三枝	小池正胤	小池章太郎	郡司正勝	桑原博史	黒木祥子	黒川洋一	黒川昌享
桜井茂治	佐久間正圓	相良 亨	坂田 新	阪下圭八	阪倉篤義	阪口弘之	酒井憲二	斎藤義光	斎藤照子	今野 達	権藤芳一	近藤瑞男	近藤潤一	今田洋三	今 栄蔵	五来 重	小山弘志	五味智英	小松英雄	小松茂美	小町谷照彦	小林芳規	小林 忠	小林 貢
渋谷虎雄	柴田光彦	篠原昭二	信多純一	信太 周	志田延義	重松裕巳	塩入良道	三田 章	澤田瑞穂	沢井耐三	佐藤要人	佐藤 仁	佐藤恒雄	佐藤 保	佐藤昌介	佐藤喜代治	佐藤 彰	佐竹昭広	笹山晴生	笹川祥生	佐古一列	櫻井武次郎	桜井徳太郎	
末中哲夫	末木文美士	新聞進一	神保五弥	真保 亨	白木直也	白畑よし	白木 進	白方 勝	白石悌三	城福 勇	下垣内和人	志村良治	清水正男	清水孝之	島本昌一	嶋中道則	島津忠夫	島田良二	島田昌彦	島田勇雄	島居 清	島崎隆夫	島崎 健	
鈴木美冬	鈴木真喜男	鈴木弘道	鈴木 博	鈴木日出男	鈴木登美恵	鈴木 亨	鈴木 棠三	鈴木太吉	鈴木重三	鈴木 進	鈴木修次	鈴木敬三	鈴木勝忠	鈴木一彦	鈴木一雄	祐野隆三	すぎもとつとむ	杉本圭三郎	杉村英治	杉戸清彬	菅原昭英	菅野 陽	菅野 陽	

田口和夫	滝沢貞夫	瀧善成	高松政雄	高橋実	高橋亨	高橋正治	高橋喜一	高野澄	高梨信博	高田衛	高崎富士彦	高崎直道	高倉新一郎	高木豊	平重道	園田香融	曾倉岑	瀬古まち子	関山和夫	関場武	関根慶子	関晃	清田啓子	諏訪春雄
田中久夫	田中宗作	田中新一	田中伸	田中謙二	田中喜美春	橘りつ	橘健二	太刀川清	多田一臣	田嶋一夫	多治比郁夫	竹本幹夫	竹村義一	武部利男	武久堅	竹鼻績	武田恒夫	竹田悦堂	竹田晃	竹岡正夫	竹内道敬	竹内誠	武石彰夫	武井協三
次田真幸	次田香澄	築島裕	塚本康彦	近石泰秋	檀上正孝	田村柳老	田村芳朗	田村富美子	田村すゞ子	田村圓澄	玉村竹二	玉城政美	玉上琢弥	玉懸博之	谷協理史	谷山茂	谷澤尚一	谷省吾	棚町知彌	棚橋正博	田中善信	田中裕	田中道雄	田中允
富永牧太	外村南都子	栃木孝惟	所功	徳田武	徳田進	徳田和夫	徳江元正	土岐武治	戸川芳郎	東儀信太郎	土井洋一	暉峻康隆	寺本直彦	寺島員章	出村勝明	鶴崎裕雄	角田一郎	堤精二	土橋寛	土田衛	土田直鎮	辻森秀英	辻英武	辻惟雄
中野幸一	中西進	中西啓	長友千代治	永積安明	中田勇次郎	中田剛直	中田祝夫	中田武司	中島理壽	中島恵子	長崎健	中川芳雄	中川徳之助	長尾高明	永井義憲	永井猛	永井和子	中井信彦	直木孝次郎	鳥越文蔵	鳥居フミ子	富山奏	友久武文	友枝龍太郎
西野春雄	西島孜哉	西沢正二	西垣晴次	西尾光一	西一祥	南波浩	名和修	成瀬不二雄	名波弘彰	永山勇	中山右尚	中本環	中村義雄	中村幸彦	中村博保	中村啓信	中村俊定	中原勇夫	永野賢	永野仁	中野三敏	中野猛	中野真作	中野沙恵
萩原龍夫	萩原進	萩谷朴	芳賀登	羽下徳彦	野村貴次	野村精一	野村純一	野間光辰	延広真治	野々村勝英	野田寿雄	野田千平	野口元大	野口博久	野口武彦	納富常天	根来司	根上剛士	新田大作	新田英治	西山松之助	西村真砂子	西村加代子	西宮一民
林雅彦	林達也	林喜代弘	林京平	早川光三郎	浜千代清	濱田隆	濱田啓介	濱田義一郎	濱口博章	馬場憲二	花咲一男	服部幸雄	服部仁	服部徳次郎	長谷川強	長谷川端	橋本義彦	橋本ゆり	橋本不美男	橋本達雄	橋本朝生	迫徹朗	萩原恭男	
廣常人世	広田二郎	広瀬朝光	広瀬千紗子	平野盛得	平野由紀子	平野健次	平野仁啓	平田喜信	平田萬里遠	平田澄子	平井卓郎	檜谷昭彦	日野龍夫	尾藤正英	肥田皓三	久富哲雄	久木幸男	樋口芳麻呂	比嘉実	半田公平	原田貞義	原田行造	原道生	林義雄

藤本幸夫	藤本德明	藤平春男	藤田百合子	藤田経世	藤田宏達	藤岡忠美	藤井学	藤井隆	藤井貞和	富士昭雄	福山敏男	福本雅一	復本一郎	福永静哉	福田秀一	福田殖	福田耕二郎	福田晃	福島邦道	福井貞助	福井毅	福井保	広戸惇
前田春彦	前田金五郎	前田愛	本田安次	本田康雄	本位田重美	堀口康生	堀切実	堀江知彦	堀内秀晃	堀信夫	堀勇雄	細谷直樹	外間守善	北条秀雄	帆足囨南次	古屋孝子	古谷稔	古田東朔	古川久	古井戸秀夫	船津富彦	二木謙一	藤原暹
松村誠一	松村明	松前健	松原秀江	松原秀明	松林靖明	松野陽一	松平進	松下英麿	松下忠	松崎仁	松尾靖秋	松尾聰	松尾葦江	松井利彦	松井静夫	待井新一	増田欣	増田正造	増田繁夫	益田宗	真下三郎	前田淑	前田正人
宮次男	三村晃功	峯村文人	峰岸明	三谷栄一	三隅治雄	三角洋一	水原一	水原渭江	水野弥穗子	水野稔	水田紀久	水島義治	水江漣子	三木幸信	三木紀人	三浦広子	丸山一彦	丸西美千男	馬淵和夫	松本隆信	松本寧至	松村雄二	松村博司
室伏信助	室木弥太郎	村山出	村田正博	村田穆	村田秋男	村瀬敏夫	村重寧	村崎恭子	村上学	宗政五十緒	武藤元昭	武藤禎夫	麥谷邦夫	向井信夫	三輪正胤	宮本瑞夫	宮本三郎	美山靖	宮田正信	宮島新一	宮坂宥勝	三宅晶子	宮尾與男
築瀬一雄	柳瀬万里	柳田征司	柳田聖山	柳井滋	安良岡康作	安田富貴子	安田純生	安田厚子	安田章	安井久善	八嶋正治	両角倉一	守屋毅	森本元子	盛田嘉徳	森田康之助	森川彰	森川昭	森正人	森一暢	森裕行	桃裕行	目崎徳衛
山本利達	山本唯一	山本武夫	山根有三	山根為雄	山中裕	山田俊雄	山田忠雄	山田清市	山田昭全	山下龍二	山下宏明	山下一海	山路興造	山澤英雄	山崎馨	山口博	山口明穂	山岸徳平	山川武	藪内清	矢羽勝幸	矢野公和	矢野貫一
頼祺一	米原正義	米谷巖	米倉迪夫	米倉利昭	吉原健一郎	吉野忠	吉永登	吉永孝雄	吉田義孝	吉田友之	吉田幸一	吉田金彦	吉岡曠	吉江久弥	吉井巖	横山英	横山正	横山紘一	横山邦治	横山伊勢雄	横道萬里雄	湯之上早苗	山本信吉
							渡辺守邦	渡辺秀夫	渡辺秀英	渡辺直彦	渡辺憲司	渡辺一郎	渡瀬昌忠	和田博通	和田英道	和田茂樹	和島芳男	若木太一		龍福義友	龍川清	笠栄治	頼惟勤

(五十音順)

# 第一卷

あ—かほ





# あ

相生熱 ↓高砂(説)

**間狂言** あきま 能楽。能の中に立ち交じり、曲の進行を図る狂言方の芸で、その役柄を間(あき)と呼び、古く俳(あき)と称した。【種類】シテあるいはワキと関わる重い役目の会釈間(あきま)と、複式能の中入りに出て曲の典拠や筋道を物語る語間(あきま)の二種があり、また曲の初めに現われ開演のきっかけをなす口開間(あきま)も挙げられる。なお常の場合とは演出を違える替間(あきま)が工夫され、これらすべてを通じ芸の難しいものを、習間(あきま)または一役間(あきま)と言つて重視する。(一)会釈間は、他の役との調和が大切な上に、仕料(あき)と台白(あき)の釣合いも難しく、相当の熟練を必要とする。まず一曲の前場の最初か後場の初めや途中だけに、ワキあるいはシテと問答する「三井寺」の門前の者や、「鞍馬天狗」の能力(あき)などが注目をひく。次に相手とのやりとりが初めにあり重ねて兩三度に及ぶ「花月」の清水寺門前の者や、「舟弁慶」の船頭などが特色を示す。また諸役に従属する「龍太鼓(あき)」の牢守や「安宅」の強力などが銘々活躍する。さらに中入りの間に特殊な勤め役を持ち、変わった場面を作る「雲雀山」の

狩人や、「烏帽子折」の小賊などは演出上効果的である。(二)語間は、前シテが中入りすると、舞台正中に坐つてワキを相手に説明する居語(あき)と、名乗座に立つたままワキと没交渉で語る立ちしゃべりなどに細分される。居語には、中入りだけに出る「江口」の所の者や、「是界(あき)」の能力などの他に、勤め役を兼ね持つ「望月」の太刀持や、「東北」の門前の者などがある。立ちしゃべりには、前シテの中入り後、「賀茂」の末社の神などのように、大小鼓に笛を和す来序(あき)の囃子で出て、三段の舞を舞つて謡留めにする末社間(あき)と、「鉢木」の早打(あき)急使)などのように大小鼓で急調に囃す早鼓で出る早打間を含む。(三)口開間には、純粹な形として一曲全体に嚴肅味を添える「鶴亀」などの官人や、会釈間を兼ねる「自然居士」の門前の者などと、語間を兼ねる「西王母」の官人などがある。【変遷】間狂言は能楽大成当初からあつたが、その後流動を続け、変遷を重ねて来た。文献が乏しく仔細に跡づけられないが、現在最も数多い語間とくに居語の成立は、会釈間より遅れて、近世に入つたところかと察せられる。それは後シテが扮装を整える中入りを活用する解説だから、両者の釣合いにより時間が変わつて来、近代は短縮化される傾向が強くなつてゐる。また単調を避けるため「賀茂」の御田(あき)や「輪藏」の鉢叩(あき)、「および」夜討會我の「大藤内(あき)」などの替間が作られ、これらは別に独立した狂言の扱いを受けるようになつた。

(古川 久)

【参考文献】山崎堂堂「間狂言の役柄分類」(『謡曲界』大正14年4・5月)。○野上豊一郎能と狂言の接合―間狂言の発達(『能の再生』昭和

10年)。○同「能と狂言(能楽全書5、昭和55年、綜合新訂版)。○山本東次郎「間狂言の研究」昭和16年。○戸井田道三「能と狂言の問題」(『文学』昭和28年8月)。○北川忠彦「初期間狂言の形態」(『国語国文』昭和29年4月)。○小林實「間狂言の分類(喜多流声の名曲集27、昭和50年)。○同「間狂言の発想―その役柄に關連して」(『国文学』昭和53年6月)。○表章「間狂言の変遷(鑑賞日本古典文学、謡曲・狂言、昭和52年)。

**あいこの若** あいきのわ 六段。説経浄瑠璃。万治四年(二六二)正月、京都山本九兵衛刊。日暮小太夫(あいき)正本か。【梗概】初段―宮中の宝くらべに、子のないことで辱しめられた二条藏人清平は、妻と共に長谷觀音に申し子を祈願する。二段目―清平に反感をもつ六条の判官は、長谷からの帰途を襲つて戦鬪となる。しかし、とつかう坊の裁きで事なきを得る(この一段は本来の説経にはなかつたであろう)。三段目―あいこの若が誕生。しかし十三の時母御台は死去、若い継母は若を熱愛して文をおくる。四段目―亡母を慕つて持仏堂に籠る若に、継母から日に七度の恋文が来るが若は激しく拒絶する。ために継母は夫に讒訴し、若は縛られて桜の木に釣り上げられる。亡母の霊がイタチになつて現われて若を救い、伯父の比叡山の阿闍梨(あいき)を頼れと告げる。五段目―阿闍梨を尋ね当てた若は、時ならぬ來訪を信じない阿闍梨に天狗のいたずらと誤解されて追い出される。若はその後も難儀にあり、世をはかんで、「かみくらのや霧生(あいき)が滝へ身を投ぐる語り伝へよ杉のむら立」の一首を残して自殺する。

六段目―若の死を知つた父は、讒言した継母を死罪とした。のち父も阿闍梨も、若が寵愛していた手白(あいき)の猿も大勢の人々と

共に投身し、若は山王大権現としてまつられる。【特色】全体としては山王大権現(日吉大社縁起で、貴公子受難物語である。継母が継子を恋するという話は珍しいが、拒否されて激しく憎悪するところが継子いじめの変形といえる。説経の者たちが尊崇した蟬丸の宮(天津市近辺)の伝説が素材になつてゐる点が目される。以前には段別のない説経らしい語り物があつたのであろう。それが本編においてはかなり浄瑠璃化が進んでいる。「愛護若物」として後の浄瑠璃・歌舞伎に多大の影響を与えた。【諸本】十八行十六丁半山本版のほかにはかなりあるが、さほど差異はなく、ほぼ固定している。宝永五年(二七〇)正月の十六行十二丁江戸鱗形屋三左衛門版は天満八太夫正本である。しかしこの八太夫は石見掾の八太夫ではなく、二代目であろう。寛文十年(一七六〇)ごろの江戸版があるが、この方は石見掾正本かもしれない。【翻刻】説経正本集2。東洋文庫「説経節」。新潮日本古典集成「説経集」。(室木弥太郎)

【参考文献】折口信夫「愛護若」(折口信夫全集2、昭和30年)。○松田修「太閤伝説の形成」(『日本近世文学の成立』昭和38年)。

**挨拶** あいさつ 俳諧用語。前句に対して礼をもつて応ずるように付句すること。『去

來抄』に「昔は恋一句出づれば相手の作者は恋をしかけられたりと挨拶せり」と見える。挨拶の語は元來禪家で用いられたものを転用。客発句、亭主脇のしきたりは、連歌以來のものであるが、俳諧では人の家を訪問しての発句は、客が主人に対して挨拶の心をこめてよめば、主人はまた挨拶を返す心で脇句をし、これを挨拶付の脇句といつ

た。〔島津忠夫〕

会沢正志齋 江戸時代の儒学者。名は安、字は伯民、通称は恒蔵。正志齋は号。代々常陸久慈郡諸沢村に住み、父与平は小官ながら廉吏と称せられた。天明二年(一八二二)五月二十五日、水戸城下下谷の宅に生れ、文久三年(一八五三)七月十四日没享年八十二歳(墓表)。水戸城西の千波原の先塋に葬られた。【事蹟】水戸藩士。十歳にして藤田幽谷に師事し、「沈深にして卓識あり」と評せられた。彰考館寫字生となり、文化元年(一八〇四)諸公子侍読を命ぜられ、後の烈公徳川斉昭の教育に従い、十七年間その輔導の任に当った。文政九年(一八二七)彰考館総裁、天保元年(一八三〇)郡奉行に転じたが、翌二年再び彰考館総裁に任じ、藩校弘道館の督学をも歴任した。藤田東湖と共に尊攘思想を鼓吹したが、経世家というよりもより学者的で、後期水戸学の学問的集大成に努力した。【著作】数多くの著述を、自ら思問編、閑聖編、息邪編の三類に分ち、さらに詩文の類を言志編・達己編の二類に収めているが、『新論』二巻が代表的著作で、江戸末期の思想界に大きな影響を及ぼした。〔國〕二六二八三

〔今井字三郎〕

【参考文献】頼谷義彦『会沢正志齋』昭和17年。○今井字三郎『会沢正志齋における儒教経伝の研究』(山岸徳平編『日本漢文学史論考』昭和49年)。

愛日樓全集

五十六卷十六冊。

漢詩文。佐藤一斎著。寛政五年(一七九三)から安政三年(一八五二)にいたる約六十年間の詩文集。【内容】巻一「心得録」、巻二「九卦広

義」、巻三「揭示問」、巻四「九序」、巻十一「十四記」、巻十五「論弁・策」、巻十六「十七説」、巻十八「二十二墓銘・墓表・墓誌」、巻二十三「二十五碑陰記・行状・伝」、巻二十六「三十三題跋」、巻三十五「書文」、巻三十六「文」、巻三十七「賦」、巻三十八「遊記」、巻三十九「贊銘」、巻四十「四十一雜著」、巻四十二「僑居日記」、巻四十三「跽帖日録」、巻四十四「日光山行記」、巻四十五「五十六詩」、より成る。八十八年に及んだ一斎の長い生涯をうかがうに足る第一の資料であるばかりでなく、その博識や学殖の深さもおのずから知られる。石川丈山が幕府の密偵をつとめていたことをそれとなく明かした「夢石川丈山詩并叙」(巻五十一)、大塩中斎との交歓を証した「寄大塩某」など、興味深い逸事も少なくない。【刊本】この全集に収められた漢詩文から主要なものを抜粋、片岡憲齋が編集・公刊したものが『愛日樓文集』四巻で、文政十二年(一八三〇)九月付の林述齋の序がある。文三巻、詩一巻の構成であるが、第四巻の付録として「日光山行記」が収められている。全集の詩文とは異同があり、公刊にあたって推敲が施されたことがわかる。【作風】一斎は唐宋八大家のうちでとりわけ韓退之と歐陽修の文章に学ぶ所が大きく、王陽明からも影響をうけた。主著言志四録の文章は、対句を駆使した厳整をきわめたもので、幕末の人士から文章の規範と仰がれたが、この全集に収める詩文も、折に触れて書かれたものながら、端正をきわめ、悠揚として迫らざる格調がおのずからそなわっているおもしろい。しかし、一気呵成に書かれたものではなく、彫琢を重ねて磨きあげられた文章であった。「一文を作らんと欲する毎に、必ず先

づ或は坐し、或は臥し、以て精神を養ひ、氣力を蓄積」へて予め其の趣向を立つ。波瀾頓挫と首尾照応と、諸心(こころ)を胸中に設くることは、猶ほ画者の意匠を立て、工者の綱墨を定むるが如し。…句々字々、法を古人に取りて、その精密を極め、改めては又改め、殆んど十日を経て後、初めて稿を起草(こと)す(「事実文編」五十八)。こうした精緻な文体は、同時代の頼山陽の闊達奔放な文章とは対極をなすもので、ながく林家の塾頭をつとめ、官学を統率した一斎の立場に通じている。なお一斎には洋学への開かれた関心があり、「万国全図凡例」「記洋製測時器」などの文章には、その合理的な思考と強靱な分析力がよくあらわれている。【諸本】都立中央図書館河田文庫に写本として存する。この全集に収められた以外の一斎の著作には、『言志四録』のほか、「周易闡外書」「論語闡外書」などを一括した『愛日樓読本闡外書』四十六巻二十七冊、天保九年(一八三八)から安政六年までの日記『腹曆』二十二冊があるが、共に河田文庫に伝わる。〔前田 愛〕

られており、流罪を歎く歌一例を除いて、四例は死者を追悼する歌である。哀傷歌の題材としては、『古今集』では、肉親や友人の死に接しての悲歎、葬送の際の感慨、弔問、喪中・諒闇・一周忌・喪明けの折の哀悼、故人の居所や遺品を見ての追憶、辞世などだが、『拾遺集』になると、世の無常の述懐、出家の決意や感懐、法事や説法の際の感想、空也・行基・聖徳太子など高僧聖人の詠作など釈教歌に類するものが加わり、『後拾遺集』から「釈教」の部立が設けられたのちも『新古今集』などには無常の歌がかなり収められ、時代が下るにつれて思弁的傾向がやや増してくる。『拾遺抄』恋下の巻末には哀傷歌が六首ばかり入っており、撰集の特殊事情も考えられるが、哀傷歌の範囲は必ずしも明確ではない。哀傷歌の死者を悼む哀切な心情の表出は情緒的で、『源氏物語』葵巻の葵の上追悼の場面など虚構の物語でも効果的に用いられている。〔小町谷照彦〕

藍染川

謡曲。四番目物。現在能。観世・金春流現行曲。宝生流は明治に廃曲。作者未詳(二百拾番謡目録)。「染川」とも。永正十一年(一五〇四)南都雨悦びの能に「宰府」として所見(申楽談儀・後人追記)。

【梗概】在京中の太宰府の神主中務頼澄(ワキ)と契りを結んだ女(シテ)が梅千代(子方)と共に筑紫へ下るが、後妻(アイ)は嫉妬のあまり夫の偽手紙を作り家人の左近尉(ワキツル)に命じて渡す。夫の愛心を嘆いた女は藍染川に投身(前場)。帰宅した神主は驚き憐み、神前に祝詞をあげると天満天神(後シテ)が現われ女を蘇生させる(後場)。【素材・趣向】世話劇風の人情物であ

るが、夢幻的要素もある。特に出典は見当らない。祝詞の文句に『二十三昧式』『天神講式』を引く。ワキ方が活躍する長大な能で上演は稀。中絶や誤伝に基づく演出上の混乱や、訛伝に由来する難解な辞句等、室町末期にすでに改変されているらしい。【影響】御伽草子に『藍染川』があり、さらに同名の古浄瑠璃もある。【翻刻】日本名著全集『二百五十番集』。謡曲大観<sup>1</sup>。

〔西野春雄〕

【参考文献】表章『藍染川』についての二三の管見(『鏡仙』昭和43年12月)。

藍染川<sup>2</sup> 一卷。御伽草子。慶応義塾図書館蔵、濃彩色の絵巻。内・外題なく、冒頭部を欠く。室町後期の写か。同名の謡曲を物語風に仕立てた作。【梗概】都から梅千代を伴い太宰府の神主を慕い下って来た梅壺の侍従は、宿の左近尉に頼み、神主へ文を託す。左近尉は、神主の妻から追い出せとの命令を受けるが、二人を守り、いずかたへか落ちようとする。侍従は、左近尉夫婦に梅千代のことを頼み、藍染川へ身を投げてしまう。梅千代が母のあとを追おうとするのを左近尉親子に止められる処へ、神主が通りかかる。左近尉から子細を聞くと、神主は京の女を追い返す妻の悪心を怒り、奇しき親子の対面をする。そして、侍従の死骸に抱きつき出家して母のあとを叩くという梅千代を思い止まらせ、神職を梅千代に継がせる。【構想・影響】作中に見える十七首の和歌は、いずれも謡曲にはないが、ほぼ謡曲の構成に即している。下半部に描かれた絵には、侍従の入水に驚く人々や、追悼の和歌を詠む人々、ふく阿弥なる通世者の神主への進言のさまざまな

どが、口語で添えられている。謡曲『藍染川』は後場に天満天神を登場させて死んだ侍従を蘇生させるが、かつての宝生流では、後シテを出さず、侍従が安養浄土に往生するキリ謡で終る形を遺していた。【諸本】寛文頃の絵入刊本『あみそめ川』(松会版、二冊。室町時代物語大成1に翻刻)は、更に天竺しし国の説話や天神縁起を付加している。〔徳江元正〕

藍染川<sup>3</sup> 五段。浄瑠璃。宇治加賀掾正本。『柳亭浄瑠璃本目録』の推定に基づいて近松門左衛門存疑作とされる。天和三年(交)二月以降翌貞享元年三月以前の京都上演か。貞享元年七月には、同年二月に竹本座を興した義太夫が、『世継曾我』に次ぐ二の替りの演目として語っている。【素材】同題材の先行作品には謡曲『藍染川』及び御伽草子『藍染川』があるが、特に前者は本作と深い関連を持っている。また、仮名草子『七人比丘尼』の第六話とも交渉を持つ。なお、『大和守日記』によって同名の歌舞伎のあったことも知られるが、その内容は不明である。【内容】謡曲『藍染川』を、太宰府天満宮の神主頼澄をめぐるお家騒動物として浄瑠璃化した作品。頼澄と継母らとの間に展開される家督相続の争いと、頼澄と都の上臈弁の君とが繰り広げる恋物語という二つの構想が、結局は天神の加護によってめでたい結末へと至るといふ形でまとめられている。そのうち、悪人にだまされて藍染川に入水した弁の君が夫頼澄の祈誓によって無事蘇生するという四段目はとくに謡曲に依拠するところが大きい。一方、作品全般を通じて、跡目をめぐる善悪二派の争論、頼澄と弁の君との風雅な交

情、忠臣頼兵衛らの示す武士の達引き、天神の奇瑞による悪人の滅亡など、浄瑠璃が独自に生み出した特色も少なからず目に留まる。【趣向】初段の、絵像の軸の中に遺書を隠して置くという趣向は明代短編小説集の『喻世明言』や『今古奇觀』に拠るものらしいとして注目されているが、後に義太夫正本『弱法師』(元禄七年九月か)にも形を変えて用いられている。また、三段目の頼兵衛の陰腹は、文耕堂らの『新うすゆき物語』(寛保元年五月)で大成される趣向の早い例であろう。なお、五段目、神輿より現われた化鳥が悪人を懲らしめた後に天神になるという場面は、この種の作品に多用される人形技巧である。【諸本】宇治加賀掾、竹本義太夫のおのの八行本の他、太夫不明の絵入十七行本(義太夫正本か)が現存する。【翻刻】近松全集<sup>1</sup>。近松門左衛門全集<sup>10</sup>。〔原 道生〕

アイヌ語

アイヌ語 日本国土の中で使われてきた二つの言語(アイヌ語と日本語)の一つ。数十年前まで生活の中の伝達手段として実用されていた。文字はないが、口頭伝承がたくさん伝えられている。現在では北海道在住の数名の古老が、子供の時に覚えたアイヌ語を記憶しているにすぎないが、最近若いアイヌの間に、民族文化遺産としてのアイヌ語を習い、伝えようという動きも出てきた。

【音韻】母音は日本語と同じ五母音、子音はやや少なく、pとb、tとdのような無声と有声の対立がない。音節構造は簡単で、北海道アイヌ語では「一子音十一母音」型の開音節(pa, hu など)と「一子音十一母音十一子音」型の閉音節(ok, hu など)の二種類。英語等に見られる子音群はない。樺太アイヌ語にはこのほかに「一子音十二個の同一母音」型の長い音節もある(Daa, haa など)。

【語順】基本的には日本語式の語順で、主語は述語の前に立ち(nuci, ek おばあさん(が)来た)、目的語・補語はそれが関係する動詞の前に立ち(mainepo kor 娘を持ってくる)、修飾語は被修飾語の前に置かれる(pono cikap 大きい鳥、前置詞はなく、後置の助詞や副詞を用いる(tan kotan ta 此の村に・ある)。しかし否定辞・禁止辞は、日本語と逆に、否定される語の前に置かれる(pono, ipe しない・食べる・食べない)。

【語形成】合成語や派生語が多く、特に動詞の場合、語根を中心に各種の接頭辞や接尾辞がついたり、重複が起こったり(ka, ka ならぬ、kiki, ka, ka ボカボカならぬ)、各種の語根が結合して合成動詞を形成したりする(waka, ka, ta 水を探ってくる=水汲みする)。しばしばかなり自由に合成や派生が起こり、しかも後述のように主語や目的語の人称を表す指標(人称接辞)がつくので、日本語や英語などに訳すときかなり長い文になるような動詞もめずらしくなく(sak, ay, e, kime, an 夏=矢を用いて=その頭が山になる=私たちが夏の狩猟すなわち弓矢を用いてする狩猟をしに山へ行く)。

【文法範疇】西洋語によく見られる文法範